KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

トマス・ハーディの『日陰者ジュード』における登場人物たちの移住と帰国の意味

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2021-03-26 キーワード (Ja): 移住, 移住政策, 帰国者, 逆植民地主義, オーストラリア キーワード (En): 作成者: 橋本, 史帆 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00007951

関西外国語大学 研究論集 第113号（2021年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.113（March 2021）

トマス・ハーディの『日陰者ジュード』における登場人物たちの移住と帰国の意味

橋　本　史　帆

要　旨

本稿では、ヴィクトリア朝時代の移住と帰国にまつわる問題が、トマス・ハーディの『日陰者ジュード』においていかにアラベラとファーザー・タイムに表出されているか検証した。アラベラのオーストラリア移住には、国内の不要者を追い出そうとする排他的移住政策と、イギリスに見切りをつけた人々によって行われた移住が描きこまれていた。しかし、アラベラの移住は家族との関係悪化とイギリスへの帰国という形で終わる。これは、様々な企みが込められていた移住政策の行き詰まりを示唆し、世間から冷遇された帰国者の実状を投影するものであった。ハーディは移住の問題点を、アラベラの移住と帰国に表出させていたのである。また、外国からの移民到来に対する拒絶反応を、「逆植民地主義」への恐怖という形でファーザー・タイムの運命に読み取れた。彼の存在は、非イギリス的なものを排除する風潮と帝国主義の正当性を読者に問いかけるものであった。

キーワード：移住、移住政策、帰国者、逆植民地主義、オーストラリア

はじめに

19世紀、多くの人々がヨーロッパを後にしたが、中でもイギリス人移住者の数はひと際多く、マージョリー・ハーパーとステファン・コンスタンティン（Marjory Harper and Stephen Constantine）によれば、その数はナポレオン戦争が終結した1815年から1930年までの間に1870万人に上るとされている(2)。イギリス移民は様々な理由から海を渡ったが、彼らの移住は国内、植民地、あるいは諸外国の政治的・社会的事情に左右されるものであった。

一方、渡航先から戻ってくる人々も多くおり、ダドリー・ベインズ（Dudley Baines）は、1870年から1914年までの間に、イギリス人出国者のおよそ40％がイギリスに戻ってきたと指摘している（39-42）。ところが、移住先から帰ってきた人々に対するイギリス国内の印象は必ずしもよいものではなく、タマーラ・S・ワグナー（Tamara S. Wagner）によると、移住に失敗して戻ってくることは「不愉快な問題」（*Victorian Narratives* 1）とみなされた。また、帰国者が帰国によって心的苦痛に苛まれるという問題もあった。

大英帝国の拡大に伴って起こったのが、帝国内から被植民者がイギリスにやってくることであった。ジャネット・C・マイヤーズ（Janet C. Myers）は、当時のイギリス人が被植民者の到来により、「植民者と被植民者との関係に仄めかされている伝統的権力の力学が崩壊する」（75）と考え、彼らの到着に「非常に狼狽させられる恐ろしい可能性」（75）を見出していたと述べている。これと似たような恐れは、そのほかの外国人にも向けられた。例えば、1880年代から東ヨーロッパで起きたユダヤ人虐殺であるポグロムが起きると、多くのユダヤ人がイギリスにやって来た。これについてウィリアム・グリーンスレード（William Greenslade）は、「外国人はすぐさま帝国の首都の再発見された深淵の恐怖と同一視された」（44）と説明している。

人々の移動が活発なヴィクトリア朝時代を生きたイギリス人作家たちは、作中に様々な形で移住にまつわる出来事を描いた。チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812-1870）は『デイビィッド・コパフィールド』（*David Copperfield*, 1850）の中で、ジェイムズ・スティアフォース（James Steerforth）に誘惑され、駆け落ちしたエミリー（Emily）のオーストラリア移住を描いているが、それは彼女の再出発を意味するものであった。アンソニー・トロロープ（Anthony Trollope, 1815-1882）が1879年に発表した『ジョン・コールディゲイト』（*John Caldigate*）は、イギリスからオーストラリアへ移住した後、母国に戻って結婚した主人公ジョン・コールディゲイト（John Caldigate）の両国における重婚問題を取り上げている。ブラム・ストーカー（Bram Stoker, 1847-1912）の『ドラキュラ』（*Dracula*, 1897）は、スティーヴン・D・アラタ（Stephen D. Arata）の言葉を借りれば、「『文明化された』世界として表出されているものが、『未開の』力によって植民地化されようとしている」（623）恐怖を、ドラキュラ伯爵のイギリス移住に表出させている。

それでは、トマス・ハーディ（Thomas Hardy, 1840-1928）の長編小説『日陰者ジュード』（*Jude the Obscure*, 1895）に登場するアラベラ・ドン（Arabella Donn）とリトル・ファーザー・タイム（Little Father Time）（以下、ファーザー・タイムと略記）は、小説の中でどのような役割を果たしているのだろうか。アラベラは主人公ジュード・フォーレイ（Jude Fawley）との結婚が破綻した後、イギリスからオーストラリアへ移住し、その後イギリスに戻る。ファーザー・タイムはアラベラがジュードと別れた後、オーストラリアで産んだ男の子で、アラベラが帰国した後、イギリスにやってくる。本稿では二人の移住と帰国に着目し、この小説が大英帝国の拡大に伴う移住問題をどのように描出しているか、彼らの家族との関係に言及しながら検討していく。

1．アラベラ・ドンのオーストラリアへの移住

19世紀から20世紀にかけて多くの人々がイギリスを出国する中、イギリス政府や大英帝国

内の植民地政府は移住地での経済的・社会的成功を強調し、積極的に移住を宣伝、推奨した。1830年代には植民論者エドワード・ギボン・ウェイクフィールド（Edward Gibbon Wakefield, 1796-1862）が中心となって、オーストラリアへの渡航費用を経済的に援助する計画が政府によって導入された。また、慈善家、起業家、移民団体も、移民の渡航準備や現地での受け入れ態勢の手助けなどを行い、移住活動を支えた。

こうして、様々な社会的背景を持った人々が、政府や個人、各種団体の援助を受け、異なる事情や目的をもって移住を果たしたが、実は移住は綿密に計画された政治的・社会的政策であり、伝統的イギリス社会を維持するうえで不都合とみなされた人々を送り出すという目的を含むものであった。例えば、人口増加に伴う貧民層の激増とそれに伴う深刻な貧困問題を解決すべく、貧しい人々の植民地移住が推し進められた。1830年代に経済的援助を受けてオーストラリアへ移住した補助移民の中には、ワークハウスに収容されていた人々や飢饉から逃れてきた貧民が混じっていた（Marjory Harper 82）。また、植民地移住を勧められた人々の中には、「きちんとしたイギリス国民の道徳規範に合わなかった人々」（Michele Ren 108）もおり、植民地は伝統的価値観から逸脱した人々を送り出す場所となった。例えば、ミドル・クラスの間では、女性は貞淑を保ち、敬虔で従順であるべきとされた。そして、良妻賢母として安らぎに満ちた家庭を提供する「家庭の天使」であることが女性の理想とされた。したがって、この女性像から逸脱する女性は、植民地へ出国するにふさわしい人物とみなされた。慈善活動をしていたディケンズが、「堕ちた女」（fallen women）と呼ばれた生活のために売春したり、未婚のままで男性と関係し、その結果、シングル・マザーになってしまった女性たちの社会復帰のために、一時的ではあるが、政府要人に彼女たちの移住対策を講じるよう取り組んでいたのは、移住が従来の道徳観を無視した人々を国外へ送り出す便宜的手段と認識されていたからである。

『日陰者ジュード』では、ジュードとの関係からアラベラを読み解いていくと、彼女をイギリスの移住政策と結びつけて捉えることができる。次に、ジュードのアラベラに対する反応を考察し、アラベラの移住が持つ意味を明らかにしていく。

石工の仕事をしながらクライストミンスター（Christminster）で学問を修め、聖職者になろうと勉強に打ち込むジュードは、ある日、養豚業を営む貧しい両親のもとに生まれたアラベラと出会う。アラベラの肉体的魅力の虜になったジュードは、彼女の自宅に招かれ一夜を共にする。その後、妊娠したと言うアラベラの偽りの告白を受け、ジュードは彼女と結婚することになる。アラベラとの関係は、ジュードの中にある矛盾をあぶりだし、突きつける。ジュードは性的誘惑に弱く、アラベラの肉体的魅力に抗えない。一方、彼には保守的な女性観を尊重するような態度がある。アラベラと交際していた頃から、彼女の奔放さを不快に思っていたジュードは、そのようなアラベラのことを、「彼が何の尊敬も抱かなかったような女であり、そして、その彼女の生活は郷里が同じという以外、彼の生活とはなんの共通点もなかった」（44）[1] 女

性と見下す。さらに、アラベラと結婚式を挙げた日の夜、彼女からパブでバーメイドをしていた過去を告げられると、ジュードはアラベラへの嫌悪感をさらに深めていき、結婚を後悔するようになる。パブはかつて売春婦が出入りするような場所であり、男性の付き添いなしに女性がパブに入ることはふしだらとされた（Valerie Hey 34）。ヴィクトリア朝時代に入っても、パブは「リスペクタブルな女性らしさにとってはタブー」（Leonore Davidoff and Catherine Hall 300）な場所であり、バーメイドは男性客の目を楽しませる「見世物」（Peter Bailey 155）であった。女性の道徳性を重視する見地から言えば、パブは女性に適した職場ではなかったのである。これらの点を考慮すると、性的に奔放なアラベラを嫌うジュードに、女性の貞節を重んじる価値観を読み取ることができる。

ジュードのアラベラに対する否定的な態度は、彼女の新天地への移住と結び付いていく。生活のために豚を殺してその血を抜き、豚の脂を溶かす作業を行うことになった時、豚の屠殺を残酷な行いと嫌悪するジュードと、生きるためにそれが必要な作業だと主張するアラベラとの間で諍いが起きる。この後、両者は決別し、アラベラは実家の家族と共にオーストラリアへ移住することになる。注意を向けるべきは、ジュードがアラベラがいなくなることを喜んでいる点である。ジュードは彼女の移住が二人にとって「賢明な道」（71）であり、「好都合」（71）であると考え、アラベラの出国に胸をなでおろす。このように、アラベラの性的奔放さを軽蔑するジュードによって移住を歓迎されるアラベラには、貧しさゆえに、あるいは当時の道徳観に反する言動を取ったことで移住するに値するとみなされた移住者の姿を読み取ることができる。アラベラの出国は、イギリス社会で厄介者とみなされた国民を、本国から追い出したイギリスの差別的な移住政策を具象化するものとして解釈できるのである。

ところで、移住は当事者の立場に立てば、希望の光でもあった。多くの独身女性にとって移住は、「母国の保守的文化の中の限られた機会から抜け出す前向きな一歩」（Harper and Constantine 219）と捉えられるところがあった。独身のワーキング・クラスの女性は貧困や個人的な問題から移住を迫られたが、それは条件の良い仕事や高い給料を得るためのものでもあり、移住は彼女たちに母国では得られない機会を与えた（Harper and Constantine 222）。

作中、移住する決意を固めたアラベラがジュードに宛てた別れの手紙には、学問ばかりに没頭する生活を送り、経済力がないジュードに対するアラベラの呆れと不満が記されていた。

> 彼（ジュード）は全く時代遅れで、彼女（アラベラ）は彼が送っているような生活が大っ嫌いだった。彼が出世する見込みも、あるいは、彼女の生活をよくしてくれる見込みもなかった。…彼女のような女性は、こんなくだらない国にいるよりも、向こうに行けばもっとチャンスに恵まれるだろう。（71）

この手紙が示唆するのは、アラベラがイギリスで生きにくさを感じていたということである。そして、彼女は母国に見切りをつけ、イギリスでは望めなかった暮らしを手に入れようと移住したことが、彼女の手紙から窺い知ることができる。アラベラのオーストラリア移住には、当時の移住政策の実状が表されているだけでなく、移住が人々の人生を切り開く役割を果たしていたことが記されているのである。

2．オーストラリアでのアラベラ・ドンと家族の関係

アラベラはジュードと別れた8か月目に移住先のオーストラリアでファーザー・タイムを出産する。その後、間もなくして彼女は、シドニーホテルと呼ばれるパブの支配人をしているかなり年上のカートレット（Cartlet）と結婚し、新生活を始める。しかし、それは幸福とは言い難いものだった。アラベラのオーストラリアでの不幸な生活は、現実にオーストラリアへ移住することになったイギリス人女性に課せられた問題と絡み、移住政策の不備を暴く。この節では、政治的・社会的政策として行われた女性移住と移住の実状に言及し、オーストラリアでのアラベラと家族の関係について考察していく。

オーストラリアではイギリス人男性の入植者が女性より圧倒的に多かったため、慢性的な女性不足、つまり嫁不足に陥っていた。そこで1830年代から人口における男女比のバランスを整えるために、イギリス政府及び植民地政府は女性の移住者を募った。一方、本国イギリスでは、1840年代頃から男性の海外移住と晩婚化のため、結婚できない女性が大量に出現していた。とりわけ、生活のために働くことを許されなかったミドル・クラスの未婚女性にとってこの状況は深刻で、彼女たちは「余った女」（surplus women）と呼ばれ、社会問題となった。オーストラリアのイギリス人男性を悩ます嫁不足とイギリスの未婚女性の増加という問題をどのように解決すべきか対策が模索された結果、「余った女」をオーストラリアに送り出すという対応策がとられた。こうして移住先に向かった女性移民は、そこで様々な役割を果たすことになる。ビバリー・キングストン（Beverley Kingston）によれば、当地に渡った「女性たちの役割は、まずはじめに、結婚と家庭を通じて（イギリスの）秩序と安定を再現し、再創造することであった」(91)。帝国主義体制を整えた1880年代以降、女性の移住が最盛期を迎えると、ミドル・クラスの女性は「家庭の天使」、そして「道徳的保護者」として、教養や美徳を通じてオーストラリアを「文明化」することを要求された（Harper and Constantine 246)。女性移民は移住先にイギリス人の家族を作り、イギリスの文化と価値観を伝える役目を付与されたのである。

ワーキング・クラスの女性移住といえば、前節で述べたように、彼女たちの側から見れば、より良い環境を求めての旅立ちであったが、政策的には植民地の人手不足を補う有効策とみなされた。しかし、そこには単なる労働力以上の意味も込められていた。オーストラリアの場

合、男女比の不釣り合いを解消するために、ワーキング・クラスの女性もまた移住地でイギリス人男性移住者の妻となり母となることを望まれたのである。「イギリス移民女性協会」（British Female Emigrant Society）をはじめとする女性の植民地移住を援助する様々な団体が創設されるなか、その中のある協会メンバーは、ワーキング・クラスの女性移民が「忠実な植民地市民の妻、母として」、「帝国に大いに貢献する」（Lisa Chilton 72-73）と考えていた。なお、ワーキング・クラスの女性は、ミドル・クラスの女性のような高い教養と道徳力を持っていないと考えられていた。したがって、彼女たちは結婚を通じてイギリスの伝統的文化を植民地に定着させ、「文明化」に尽力する使者とはみなされなかった。しかし、ワーキング・クラスの女性の結婚は、広い意味でのイギリス社会の移植と拡大、そして大英帝国の存続に必要不可欠なものであった。

では、ワーキング・クラスの女性の移住先での暮らしはどのようなものだったのだろうか。移住した女性の数だけ物語があるが、当地で活路を見いだせなかった女性に注目してみる。19世紀のシドニーに住むシングル・マザーについて研究したターニャ・エヴァンス（Tanya Evans）は、ワーキング・クラスの未婚女性が貧しさのために子供を育てられず、孤児院にやってくることが多かったことや、女性の低賃金と雇用機会不足のため、家庭が破綻することも珍しくなかったと指摘している（75-77）。19世紀終わり頃のオーストラリアとカナダにおける女性と労働について分析したレリーン・フランセスら（Raelene Frances et al.）は、その研究の中で家庭内暴力に苦しむ貧しい女性について言及している（63）。貧しさゆえに、女性が移住地で必ずしも幸福に満ちた家庭を築けたわけではなかったのである。

作中では、オーストラリアに移住したアラベラが、女性移民に求められた役割を果たすように描かれていない。アラベラはファーザー・タイムを出産してすぐ、生活していくために子供を両親に預けている。その後カートレットと結婚し、数年間を過ごすが、彼女はこの間ファーザー・タイムを引き取らず、その子の養育を両親に任せている。カートレットと不仲になり、イギリスに戻ることになった時、アラベラはファーザー・タイムを両親のところに残したままひとりで帰国してしまう。このように、アラベラは母親としての役割を果たすことなく、オーストラリアを去るのである。さらにまた、彼女とカートレットとの結婚生活もうまくいかない。アラベラはカートレットとの暮らしを振り返り、酒を飲んだ彼にひどい目にあわされたことがあると言っている。彼女が彼のもとを離れてイギリスに戻る決断をしたのも、カートレットとの激しい口論にあった。つまり、酒癖が悪く、気性が激しいカートレットから、アラベラは家庭内暴力に近いものを受けていたと考えられるのである。このように、アラベラはオーストラリアで温かな家庭を持つことができなかったのである。

家族と不和に陥ったアラベラの状況は、オーストラリアで貧困や暴力に苦しみ、家庭を維持できなかった現実の女性の体験と一致するものである。したがって、アラベラと家族の関係

は、移住の負の側面を表すものとして読むことができる。また、アラベラが経験する家庭崩壊は、本国イギリスが期待したものとは異なる家族のありようがオーストラリアにあることを示している。このようなところから、アラベラと家族の軋轢は、ワーキング・クラスの女性移民に託された、結婚を通じて植民地をイギリス風に染めようとする移住政策と帝国主義的企みの失敗に読み替えられるのだ。

ハーディは移住問題に関して具体的なコメントを残していない。ハーディの２番目の妻フロレンス・エミリー・ハーディ（Florence Emily Hardy, 1879-1937）が著者とされているものの、実際は作家自身が執筆・編集を行っていた伝記『トマス・ハーディ伝』（*The Life of Thomas Hardy*, 1962）や、ハーディが作家・詩人として活動していた時に記した手紙を集めた書簡集で、1978年から2012年までに刊行された全８巻からなる『トマス・ハーディ書簡集』（*The Collected Letters of Thomas Hardy*）などに目を向けても、移住や移住政策に関する作家の言及は見当たらない。そこで、ハーディの小説に目を転じると、『ダーバヴィル家のテス』（*Tess of the D'Urbervilles*, 1891）のエンジェル・クレア（Angel Clare）が、ブラジル移住を通じて精神的成長を遂げてイギリスに帰ってくる以外、外国への旅立ちや外地からの帰国に関わる事情は、登場人物に不幸を与えるものとして描かれている。短編小説「丘の家の侵入者」（"Interlopers at the Knap", 1884）では、オーストラリアへの移住に失敗したフィル・ホール（Phil Hall）一家が、一文無しになってイギリスに戻ってくる。1886年に出版された『カスターブリッジの町長』（*Mayor of Casterbridge*）のスーザン（Susan）は、夫マイケル・ヘンチャード（Michael Henchard）によって水夫リチャード・ニューソン（Richard Newson）に売られた後カナダに渡り、貧しい暮らしを送ることになる。『ダーバヴィル家のテス』では、ブラジルに移住したエンジェルが、貧困に苦しみ、飢餓や病気で命を落とすイングランド人を目撃する場面が描出されている。ハーディは移住の理想と現実や移住政策の不備をよく理解しており、その仕組みに言い分があったに違いない。アラベラの移住のありようは、移住政策に対するハーディの懸念を表すものとして解釈することができるのだ。

３．アラベラ・ドンの帰国

希望を抱いてオーストラリアに移住したにもかかわらず、アラベラはより良い暮らしを手にすることができないままイギリスに戻ってくることになる。この彼女の帰国には、外国から母国に戻ってきた人々の問題が映し出されている。この節では、当時の帰国者を取り巻く状況に言及しつつ、アラベラの帰国の意味を探る。

すでに述べたように、19世紀後半のイギリスでは、出国者の約40％が母国イギリスに戻ってきたと言われている。この数字には、旅行や短期の仕事から戻ってきたり、家族や友人を訪問

して帰ってきた人々のほか、何らかの理由で移住生活に終止符を打ち、帰国してきた人々が含まれていた。ここで着目したいのが、移住先から帰ってきた人々の中に、母国での疎外感に苦しむ人々がいたということである。ハーパーとコンスタンティンが「ルーツに戻ることが心の平安に結びつくかというのも問題であった」(308) と述べているように、帰国者が必ずしも落ち着いた暮らしを母国で送れるわけでもなかった。帰国者を迎える地元の人々が、移住への羨ましさや嫌悪感から意図的に帰国者を無視したり、帰国者によって持ち込まれた植民地の富や雰囲気を疎んじたり、移住に失敗して戻ってきた人々を冷たくあしらうことがあったからである (Harper and Constantine 330-31)。このようなところから、帰国者が故郷の家族や土地の人々と馴染めず、孤独を募らせ再び外地に出掛けることもあった。

作中、オーストラリアから戻ってきたばかりの頃のアラベラの状況には、現実の帰国者が経験した辛酸が描かれている。アラベラは帰国すると、故郷の村やジュードと過ごした村には戻らず、彼女とは縁のないクライストミンスターでバーメイドとして生計を立て始める。彼女は再会したジュードに、その町で住むようになった理由について、「たとえあたしが気にしたとしても、ここじゃ、誰もあたしのことなんて知っていそうにないからね」(181) と述べている。アラベラはこれ以上、詳しい理由を説明しないが、この言葉から、アラベラが自分の過去を知る住人がいる村に戻りたくないことがわかる。彼女が故郷に戻れば、ジュードとの諍いをきっかけにオーストラリアに移住したにもかかわらず、結局戻ってきたことが噂になることは想像に難くない。このようなところから、アラベラは昔住んでいた村と距離を取ろうとしていると推察できる。なじみの村から離れて生きることを決断したアラベラに、故郷と馴染めず、孤独に陥りがちだった帰国者の実情を垣間見ることができる。

ディケンズの『大いなる遺産』(*Great Expectations,* 1860) や、メアリ・エリザベス・ブラッドン (Mary Elizabeth Braddon, 1835-1915) の『オードリー夫人の秘密』(*Lady Audley's Secret,* 1862) のように、一部のヴィクトリア朝文学は歓迎されない帰国者を描いたが、実際のイギリス社会でも帰国者を疎んじる風潮があった。すでに述べたように、故郷の人々が植民地で暮らしたことのある人々を妬んだり、移住に失敗した人々を見下すことがあったが、移住者の帰国をより広い視野に立ってみてみると、彼らは政治的・社会的政策としての移住が失敗に終わったことを暗示させる存在であった。というのも、移住には貧しい人々や道徳規範を破った人々を植民地に送り、女性を通じてイギリス流の価値観を移住地に植え付けるという目的があったからである。したがって、帰国者はその計画がうまくいかず、イギリス社会に不適格とみなされた人々が戻ってくることを指していた。さらにワグナーの指摘によれば、帰国者は「前例のない世界動向の時代にあって、ますます変化する社会での不安感を具現していた」(“Settling Back in at Home” 114)。イギリスに帰ってくる人々の中には、詐欺、脅迫、重婚などの罪を犯し、イギリスにいた頃とは異なる身元や身分を手に入れたり、家族を捨てる者が

いたからである。こうしたことから、当時のイギリスでは、帰国者を犯罪や社会秩序の乱れと結び付けて考えるような雰囲気が生まれた。

1860年代から1870年代にかけて起きた「ティッチボーン事件」（Tichborne case）[2] と呼ばれる法的事件は、帰国者と負のイメージを結び付ける出来事だった。この事件は、1854年に准男爵の相続人ロジャー・ティッチボーン（Roger Tichborne）が、チリを出発した船の難破によって亡くなったことに端を発している。息子の生存を信じる母親がロジャーの行方を捜す広告を出したところ、1865年、オーストラリアの肉屋の店員だったトマス・カストロ（Thomas Castro）と称する人物が、ロジャーだと名乗りでた。翌年、イギリスに渡ったカストロは、ティッチボーン家の母親に自分がロジャーであることを納得させることに成功する。しかし、彼の主張の正当性を確かめる裁判が起こると、実はカストロがロンドン出身の肉屋の息子アーサー・オートン（Arthur Orton）であることが判明する。そして、1872年、裁判に負けたカストロは、偽証罪で禁固14年を言い渡された。

この事件を通じて明らかになったことは、カストロが生活のためにイギリス、チリ、オーストラリアを転々とし、その過程で職業や名前を変え、最終的にロジャーと名乗って帰国したということである。カストロの人生は、移住と外地からの帰国を通じて、別人を装って社会的身分を上げることが可能であることを多くの人々に認識させるものであった。また、この一件は、本物のロジャーを見分けることができなかったティッチボーン家の希薄な家族関係と、一家の財産を巡る親族間の醜い争いを露見させることになった。オーストラリアから戻ってきたカストロは、当時の人々にイギリスの階級社会と神聖視されていた家庭さえも崩壊しうるということを想起させたのである。

このような事情からアラベラの帰国を考えると、それはイギリス社会にとって歓迎できないものとなる。政策的に見れば、彼女の帰国は、イギリスの価値規範を破った人物がイギリスに舞い戻ってくることを意味するからである。また、アラベラは経済的に成功していないため、彼女の帰国は移住によって国内の貧困問題に対処しようとした移住政策とは相いれないものとなる。加えて、アラベラが家族と疎遠になり、イギリスに戻るということは、移住女性の結婚を介して帝国内にイギリスの秩序を定着させようとした試みが失敗に終わったことを示唆している。このように、アラベラの帰国は移住政策のつまづきを具象化している。したがって、彼女の帰国は社会的に喜ばれないものとして読むことができるのだが、それはまた、移住の仕組みに問題があることを明らかにするものでもある。つまり、帰国者アラベラは、作中で移住のあり方に疑問を呈する役割を果たすように描出されているのである。

アラベラの帰国は、名前と職業を変え、准男爵の相続人になりすましたカストロの帰国と同様に、犯罪と社会秩序の乱れを思い起こさせるものでもある。アラベラはジュードと正式に離婚しないまま移住し、オーストラリアでカートレットと結婚したことから、彼女は重婚したこ

とになる。イギリスに戻ってからは、ジュードと結婚していることを隠し、すでに破局したはずのカートレットの姓を名乗って暮らし続ける。その間アラベラは、イギリスにやって来た息子であるファーザー・タイムの養育をジュードに押し付け、少年がオーストラリアで暮らしていることにしてしまう。アラベラは、結婚と家族の存在を偽りながらイギリスでの新生活をスタートさせるのである。このような彼女に、当時の読者がイギリス社会を不安に陥れたカストロのような帰国者の姿を見出すことは容易だったはずである。アラベラは、人々が帰国者に抱いた恐れを暗喩的に表している登場人物と言える。言い換えれば、彼女はイギリスの伝統的社会の揺らぎを示唆する人物として描出されているのである。

4．リトル・ファーザー・タイムのイギリス移住

ファーザー・タイムは母親であるアラベラに育てられることなく成長し、アラベラの家族がイギリスに戻ることになったため、彼らと共にイギリスにやってくることになる。その後、ファーザー・タイムはジュードとその従妹で同棲相手であるスー・ブライドヘッド（Sue Bridehead）に引き取られ、家族として過ごした後、幼い弟妹を手にかけ、自ら命を絶つ。

衝撃的な最期を遂げるファーザー・タイムの正体について、これまで様々な議論がなされてきた。ファーザー・タイムの自殺を分析し、彼が象徴するものを追求した研究者のひとりが、デイヴィッド・セシル（David Cecil）である。小説が執筆・出版された19世紀後半、イギリスの人々は伝統的な価値観と、既存の社会制度を疑問視する新しい価値観が交錯する流動的な社会に生きていた。セシルの説は、このような混乱の時代に生きる人々の不安が、自分が生きる世界に幻滅して自殺を選ぶファーザー・タイムの姿に具象されているというものである。また、アルバート・J・ゲラード（Albert J. Guerard）は、そのようなファーザー・タイムが「新しい世代の生に消極的な意思を象徴している」（69）と論じている。

さらに、ファーザー・タイムの容姿に着目した論もある。彼は、「『少年』の仮面をつけた『老人』であった」（276）と評され、「80代の老人」（311）のように老いさばらえた姿をしている。エレイン・ショーウォルター（Elaine Showalter）は、そのようなファーザー・タイムに梅毒の影響を読み取っている（108）。これは、梅毒が19世紀末のイギリスの家庭に入り込み、家族の間に病が広がっていたことを受けての解釈である。

それでは、老人のような容姿をしたファーザー・タイムとオーストラリアとの関連性についてはどうだろう。ある日突然、ファーザー・タイムを引き取ることになったスーは、初めて会ったその子を見て、「不思議ね、ジュード。こういう奇妙に年取った子たちは、大方いつも新しい国からやってきたのよ」（280）と言っている。スーは子供の容姿とオーストラリアを結び付けているのだが、この点に注意を向けてファーザー・タイムの人物像を突き止めようとする研

究者は皆無に等しい。では、オーストラリアと関連付けられた老人のような子供であるファーザー・タイムは何者で、何を表象しているのだろうか。この問題を考えていくために、次に、ファーザー・タイムの出自を検討する。

ファーザー・タイムの存在が初めて明かされるのは、イギリスに舞い戻ったアラベラが、オーストラリアでその子を産んだことを知らせる手紙をジュードに送った時である。この手紙に基づけば、ファーザー・タイムの父親がジュードである可能性は高い。ところが、作品ではファーザー・タイムの生物学上の父親が誰か明記されていないうえ、ジュードはその子との親子関係について「僕はわからないよ」(274) と答え、彼の実子か確信が持てないような発言をしている。初めてファーザー・タイムに会った時のスーの言葉もまた、ジュードが父親ではないかもしれないと思わせるコメントである。つまり、作品では、ファーザー・タイムの父親が誰かあいまいにされており、ひょっとしたらジュードが父親ではない可能性もあるかのように書かれているのである。そうなると、オーストラリア出身の老人のような姿をしたファーザー・タイムは、当地の現地人を思い起こさせる人物として造形されているのではないだろうか。言い換えれば、それは当時の科学者が「ヨーロッパの白人と猿の間に位置付けた」(Cynthia Eagle Russett 14) 他人種の姿であったと考えられる。

イギリスに渡ってからのファーザー・タイムの人生は試練に満ちたもので、彼がジュードたち家族以外の人々から受け入れられることはない。では次に、イギリス社会に見られた人種観と「逆植民地主義」(reverse colonialism) に触れながら、ファーザー・タイムのイギリス移住を考察することにする。

1859年にチャールズ・ダーウィン (Charles Darwin,1809-1882) が『種の起源』(*On the Origin of Species*) を発表し、その進化論が浸透すると、進歩とは反対の概念である退化が脚光を浴びるようになった。退化はもともと精神医学の理論として登場したもので、その起源はフランス人精神科医ベネディクト・モレル (Bénédict Morel, 1809-1873) の遺伝説における変質論にあるとされている。イギリスでは、1870年代に犯罪人類学を確立させたイタリア人のチェーザレ・ロンブローゾ (Cesare Lombroso,1835-1909) の学説が、国内の退化理論に影響を与えた。彼の説は現在否定されているが、何世代も前の先祖にみられる特徴が、突然変異で子孫に甦って先祖返りするというものであった (Greenslade 92)。

退化の概念が人類学、犯罪学、性科学などの学問を吸収し、社会に定着していく中で、人々はイギリスの社会、国そして帝国が衰退し、人間もまた先祖である猿のような状態に戻り、衰えていくのではないかと恐れるようになる。東インド会社のインド支配を終わらせた1857年のセポイの乱や、太平天国の乱の鎮定に活躍したチャールズ・ゴードン (Charles Gordon, 1833-1885) の死を招いたスーダンで起きたマフディー教徒の乱 (1885年) は、イギリスの国力の弱まりを露わにする出来事であった。それはまた、イギリス人という人種が下位に位置付けられ

た植民地の人々に脅かされることであり、イギリス人が人種的に退化しているのではないかという不安を生み出した。裏を返せば、これはイギリス人の人種的優位性を主張するものであり、それが脅かされることを恐れた人々は、ポグロムによるユダヤ人移住や、マイヤーズが詳述する、植民地移住によって生じた結果として、大英帝国の植民地から土着の人々がやってくる「逆植民地主義」への警戒心を強めていった（73）。後者について言えば、被植民者の到来は植民地の文化や生活スタイルがイギリスに持ち込まれ、イギリス人との異人種間結婚や混血化がすすむことであった。被植民者のイギリス流入は、彼らが植民者に代わってイギリスを侵略することであり、イギリスの政治的・文化的・人種的優位性が失われていくことを示唆していたのである。

この「逆植民地主義」への恐怖を考えれば、他人種を想起させるファーザー・タイムの渡英は、植民地から本国イギリスへの侵入を意味するものとして読める。ファーザー・タイムは学校で同級生たちから、彼を息子として育てるスーが彼の「名ばかりの母親」（301）であると指摘され、いじめられる。つまり、同級生たちは、ファーザー・タイムとスーの間に血縁関係がないことを揶揄しているわけである。では、彼らはどのようにして二人が血のつながらない親子であることに気付いたのだろう。ここでスーがファーザー・タイムを見て、彼の容姿とオーストラリアをリンクさせたことを思い返せば、ファーザー・タイムとスーの親子関係を怪しむ同級生たちは、オーストラリアの現地人を思い起こさせるファーザー・タイムの姿を見て彼とスーの関係に気付き、少年をからかったと考えられる。つまり、同級生たちはファーザー・タイムの非イギリス性に気付いたと解釈できる。そして、このような同級生たちによるファーザー・タイムに対する嫌がらせは、彼らの心の中に「逆植民地主義」への恐怖が潜んでいることを表している。

最後に、ファーザー・タイムの自殺について考察する。仕事と住む家を失い、困窮する両親を見て心を痛めたファーザー・タイムは、養わなければならない自分や異母弟妹が両親の負担になっていることに気付き、自分の存在意義を疑うような発言を始める。そしてついに、彼はスーが目を離したすきに弟妹を殺害し、自殺する。少年の死は、子供のせいで苦労する両親を思ってのものである。しかし、他人種を思わせるファーザー・タイムの自死は、「逆植民地主義」に怯えた人々にカタルシスを与えるものではなかったか。19世紀後半、優生学的考えを持った一部の知識人たちは、自殺を「最も不適格な人種的血統の有益的排除」（Olive Anderson 70）とみなした。ファーザー・タイムの自死は、イギリス人の政治的・文化的・人種的優位性を守りたいという願望にこたえるものになっていると解釈できるのである。

少年の人生に、「逆植民地主義」への強迫観念や優生学思想が投影されていることは否定できない。しかし、これは、ハーディが排他的思想の持ち主であったということではなく、彼が社会の実状に鋭く反応した作家であったことを示している。小説では、ジュードとスーは

ファーザー・タイムを実子のように受け入れ、愛情を注いで育てている。ファーザー・タイムもスーをお母さんと呼んで懐いている。ジュード一家への世間の風当たりは強かったが、ファーザー・タイムが亡くなるまでのジュードたちの関係は円満で、愛情にあふれた家庭が築かれていた。他人種を思わせるファーザー・タイムを受け入れ愛するジュードたち家族のありようは、異なる国籍や人種からなる家族のあり方を認めるものである。作家は、大英帝国の広がりにより多人種国家の様相を帯びつつあったイギリスの実状を、ジュード一家に描出しているのである。

おわりに

本稿では、ヴィクトリア朝時代の移住と帰国にまつわる問題が、『日陰者ジュード』において、いかにアラベラとファーザー・タイムに表出されているか検証した。アラベラのオーストラリア移住には、イギリス社会にとって都合が悪いと思われた国民を国外に追い出そうとする移住政策が映し出されていた。しかし、アラベラ本位に見れば、彼女の移住はより良い暮らしを手に入れようとする前向きなものであった。アラベラの旅立ちには、不要者を追い出そうとする排他的な企みが込められた移住政策と、イギリスに見切りをつけた人々によって行われた移住が描きこまれていたのである。

しかしながら、アラベラの移住は、家族との関係悪化とイギリスへの帰国という形で終わってしまう。アラベラの帰国は、前向きに行われた移住が失敗に終わったことを意味するだけでなく、イギリスで厄介者とみなされた国民を国外へ追い出し、女性移住を利用して帝国にイギリス社会を植え付けようとした移住政策のあり方に疑問を投げかけ、イギリスの伝統的秩序に揺さぶりをかけるものであった。さらに、アラベラには、故郷に馴染めず苦労した実際の帰国者の姿を見出すことができた。ハーディは移住の実態を見抜き、アラベラの移住と帰国に移住政策の不備を表出させたのである。ここに、移住に懐疑的なハーディの見解を読み取ることができるのである。

小説では、帝国拡大による外国からの移民到来への拒絶反応を、「逆植民地主義」への恐怖という形でファーザー・タイムの運命に読み取ることができた。ファーザー・タイムの容姿や出自から、少年は他国からの侵入者を想起させる存在であった。そして、そのような彼の自死は、当時の人々が抱えていた他人種の侵入に対する不安を和らげるものであったと受け取れる。しかし、作品はファーザー・タイムを家族の一員として受け入れるジュード一家を描いている。ジュード一家は様々な人種や文化が混在したイギリスの実態を投影したものであり、それは非イギリス的なものを排除する風潮と帝国主義の正当性を読者に問いかけるものなのである。

謝辞
本研究遂行にあたり、日本学術振興会、科学研究費助成事業（課題番号：19K13126）の助成を受けた。ここに厚く御礼申し上げる。

付記
本稿は、日本ヴィクトリア朝文化研究学会第19回大会（2019年11月23日、近畿大学）での口頭発表「トマス・ハーディの『日陰者ジュード』における移住と帰国の意味―アラベラを中心にして」の原稿に、大幅な加筆・修正を施したものである。

注

1）本稿におけるテクストからの引用は、Thomas Hardy, *Jude the Obscure*（London: Penguin, 1998）によるものであり、本文中括弧内にその頁数を示した。

2）ティッチボーン事件については、Rohan McWilliam, *The Tichborne Claimant: A Victorian Sensation*（London: Hambledon Continuum, 2007）を参照のこと。

引用文献

Anderson, Olive. *Suicide in Victorian and Edwardian England*. Oxford: Oxford UP, 1987.

Arata, Stephen D. “The Occidental Tourist: *Dracula* and the Anxiety of Reverse Colonization.” *Victorian Studies* 33(1990): 621-45.

Bailey, Peter. *Popular Culture and Performance in the Victorian City*. Cambridge: Cambridge UP, 1998.

Baines, Dudley. *Emigration from Europe, 1815-1930*. Basingstoke: Macmillan, 1991.

Cecil, David. *Hardy the Novelist: An Essay in Criticism*. London: Constable, 1954.

Chilton, Lisa. *Agents of Empire: British Female Migration to Canada and Australia, 1860s-1930*. Toronto: U of Toronto P, 2007.

Davidoff, Leonore and Catherine Hall. *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class 1780-1850*. London and New York: Routledge, 2019.

Evans, Tanya. “The Meanings and Experiences of Single Mothers in Nineteenth-Century Sydney, Australia.” *Annales De Démographie Historique* 1 (2014): 73-96.

Frances, Raelene, Linda Kealey and Joan Sangster. “Women and Wage Labour in Australia and Canada, 1880-1980.” *Labour/Le Travail* 38(1996): 54-89.

Greenslade, William. *Degeneration, Culture and the Novel 1880-1940*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.

Guerard, Albert J. *Thomas Hardy: The Novels and the Stories*. Cambridge: Harvard UP, 1949.

Hardy, Thomas. *Jude the Obscure*. 1895. London: Penguin, 1998.

Harper, Marjory. "British Migration and the Peopling of the Empire." *The Oxford History of the British Empire*. Ed. Andrew Porter. Vol. 3. Oxford: Oxford UP, 1999. 75-87.

Harper, Marjory, and Stephen Constantine. *Migration and Empire*. Oxford: Oxford UP, 2010.

Hey, Valerie. *Patriarchy and Pub Culture*. London: Tavistock Publications Ltd., 1986.

Kingston, Beverley. "Women in Nineteenth Century Australian History." *Labour History* 67(1994): 84-96.

Myers, Janet C. *Antipodal England: Emigration and Portable Domesticity in the Victorian Imagination*. Albany: State U of New York, 2009.

Ren, Michele. "The Return of the Native: Hardy's Arabella, Agency, and Abjection." *Imperial Objects: Victorian Women's Emigration and the Unauthorized Imperial Experience*. Ed. Rita S. Kranidis. New York: Twayne Publishers, 1998. 108-25.

Russett, Cynthia Eagle. *Sexual Science: The Victorian Construction of Womanhood*. Massachusetts: Harvard UP, 1989.

Showalter, Elaine. "Syphilis, Sexuality, and the Fiction of the Fin de Siècle." *Sex, Politics and Science in the Nineteenth-Century Novel*. Ed. Ruth Bernard Yeazell. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1986. 88-115.

Wagner, Tamara S. "Settling Back in at Home: Impostors and Imperial Panic in Victorian Narratives of Return." *Victorian Settler Narratives: Emigrants, Cosmopolitans and Returnees in Nineteenth-Century Literature*. Ed. Tamara S. Wagner. London and New York: Pickering & Chatto Limited, 2011. 111-28.

Wagner, Tamara S. *Victorian Narratives of Failed Emigration: Settlers, Returnees, and Nineteenth-Century Literature in English*. New York: Routledge, 2016.

（はしもと・しほ　外国語学部准教授）